

博士学位論文審査要旨

2019年1月11日

論文題目： 森有礼の教育思想史研究—外交官の「開化論」と未完の近代化構想—

学位申請者： 齊藤 大輔

審査委員：

主査： 社会学研究科 教授 沖田 行司

副査： 社会学研究科 教授 中川 吉晴

副査： 社会学研究科 教授 金子 邦秀

要旨：

森有礼研究は、早くは森の暗殺の翌年の1889年に徳富蘇峰が「国民之友」に掲載した「森有礼君」の中で、前半生の「革新主義者」から後半生の「保守主義者」への転向という、二項対立的な視点から叙述しているが、永らく「国家主義者」や「国体主義者」としても森有礼像が通説となってきた。戦後になって、森の思想を一貫して近代主義的な自由主義者や機能主義的な欧化論者としての森有礼像が登場し、ほぼ定説となっている。本論文では、森の外交官としての立場を軸に「目的」としての日本の対外独立と、「手段」としての西洋化という方法でテキストの読み直しを行った斬新的な論文である。本論文はⅢ部構成となっており、第Ⅰ部では「脱西洋主義者」としての森有礼の思想形成過程を史料に基づき明らかにし、第Ⅱ部では外交官としての立場性に規定された「開化論」の思想構造の特質を新たに発見した英文資料を中心に解明している。第Ⅲ部では森有礼の近代化構想としての国家論と文部大臣として展開した教育政策や教育思想との関連性をこれまでの森研究で見落とされてきた史料を用いて分析している。序章において、徳富蘇峰以来の二項対立による森の思想転向説をとる本山幸彦、一貫した近代主義的なヒューマニスト説を主張する林竹二や西洋思想を忠実に模倣する機能国家論者としての森を論じる園田英弘の研究、森の初期思想を西洋の相対化の視点を西洋近代の内に捉えようとする沖田行司の諸説を丁寧に検討し、「脱西洋主義者」という新しい森有礼研究方法を提示している。第Ⅰ部では、薩摩藩から派遣されたイギリス留学からアメリカに渡り、スエーデンボルグ派の宗教者 T.L. ハリスが主宰した新生社のコロニーでの体験を通して、「脱西洋主義」としての森の西洋体験の特異性を捉え、資本主義が浸透した欧米の腐敗を指摘して、西洋観が大きく転換する過程を、史料に基づいて解釈しながら実証している。かつて称賛したアメリカの「共和政体」や「個人の自由」が理念とは真逆に社会と個人の倫理的荒廃を招いているという森の言説を紹介し、「脱西洋主義者」という方法的概念について説明している。また外交官として、森が文明国家としての日本について発信活動をし、アメリカ社会に親日派を形成していった過程を具体的な事例を挙げて明らかにし、外交官としての職分意識とその視点を実証的に明らかにしている。第Ⅱ部においては、外交官としての森の「開化論」の特質を論じている。英文で書かれた「日本における宗教自由論」や「明六雑誌」で掲載した「妻妾論」などは、いずれも日本の開化を対外的に証明するものとして意味づけ、その目的とするところは幕末に締結した不平等条約の改定にあったと論証している。さらに、新たに発見した英文の新史料を用いて、森の「開化」の意味を再検討している。これらの英文資料は、本論文においてはじめて翻訳されたもので、今後の森研究にとって重要な意味を持つものと考えられる。第Ⅲ部においては、森有礼の近代化構想を、教育政策を軸に考察している。西洋列強と対峙して、国家独立という目的を最優先した森は、教育と学問を区別した上で、教育における「帝国臣民」の育成と「開化」を推進する専門家の育成と選抜を構造的に設計した

学校制度を実施し、儒教やキリスト教などの「価値」を相対化して「国体主義」に収斂する教育機能を重視したと論じている。最後に、森が「開化」を受け入れる主体の根拠とした「国体論」の構造を、福沢諭吉の近代市民社会論と対比しながら明らかにしている。また「国体」をささえる「国民議会」と教育構想との関連に言及し、日本の国家独立を達成する手段としての教育の機能を実証的に論証した。

本論文は、独創的な研究方法と斬新な問題設定を駆使した研究であると認められる。やや強引な論証の部分が見られないわけではないが、緻密な実証と新資料に基づく精度の高い森有礼研究であると評価できる。

よって、本論文は博士（教育文化学）（同志社大学）の学位を授与するに相応しいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2019年1月11日

論文題目： 森有礼の教育思想史研究—外交官の「開化論」と未完の近代化構想—

学位申請者： 齊藤 大輔

審査委員：

主査： 社会学研究科 教授 沖田 行司

副査： 社会学研究科 教授 金子 邦秀

副査： 社会学研究科 教授 中川 吉晴

要旨：

2019年1月11日17時00分より60分にわたり、博士論文の内容に関する公開講演をおこなった。聴衆者から内容に関する質問とそれに対する応答が30分間おこなわれた。何れの質問にも適切に答え、日本教育史や外交史、政治史に関する深い知識が確認された。その後、主査と副査二名を交えて約30分間質疑応答をおこなったが、いずれの質問にも的確に答え、今後の研究課題も充分認識していることが確認された。

論文提出者はすでに2015年3月4日に実施された博士候補生第一次試験で、教育文化学に関する論文試験に合格し、2015年7月22日に実施された博士候補生第二次試験では、博士論文に関する方法論の特質を英語で論じる試験に合格している。

よって、総合試験の結果は合格であると認められる。

博士学位論文要旨

論文題目：森有礼の教育思想史研究—外交官の「開化論」と未完の近代化構想—

氏名：齊藤 大輔

要旨：

本稿の森有礼思想史研究におけるアプローチの特徴は、従来の森研究において主として用いられてきた視角である、前期における啓蒙家としての森有礼、後期における初代文相としての森有礼という分析軸や評価軸ではなく、「外交官としての森有礼」という視点から、主に森の「開化論」の構造と、対外的に欧米人に向けて日本の「開化」をアピールし、また、対内的に「開化」を推進するための「方法」上の変化を明らかにすることで、森の思想には前期や後期といった区別や転向は存在せず、あくまでも森の一貫した「目的」に対して、その「目的」を実現するための「手段」に関わるアプローチ法が森の対峙した現実＝時代の課題との関係において変化したものと分析したことである。

森の「開化論」の構造を分析する上で、まず本稿が注目したのは、森の思想が近代的か封建的か、或いは革新的か保守的か、または個人主義的で自由主義的か、或いは国家主義的で専制主義的かといった従来のような研究者の位置した時代における存在拘束性を免れない「価値判断」によって森の思想の是非を論じ、その特徴を説明しようとするのではなく、森の同時代の史料に依拠してその思想構造を「目的」と「手段」の関係から整理し直すことであった。森の「目的」とは、内政、外交の全てを専治する権限を保有し、外国から対内的、対外的な管制を及ぼされることのない独立した主権国家を確立することであり、従って、その「目的」を阻む明確なバリアである不平等条約の改正を実現して欧米側に奪われた法権と税権を取り戻さなければならなかった。欧米側を条約改正のテーブルに付かせ、交渉上における譲歩を引き出させるためには、日本が「文明国家 enlightened nations」であるという評価や認知を欧米側から獲得することが大前提となり、不平等条約の改正や主権国家の確立という森の最終「目的」を実現する上での従属「目的」＝必要条件として位置付けられていた。しかし、この「文明国家」としての国際的評価という森の理想とは対照的に、森が外交官として対峙しなければならなかった日本のリアルな評価とは、「野蛮非文明国家 Barbarous Country」、「地球上の一大淫乱国」、「未開国」、「奴隷国」、そして欧米の「文明国家」からなる国際社会に対して、アジアという野蛮非文明の「カテゴリ classification」の中に位置付けられた日本、という森の理想とはかけ離れた現実であった。森は外交官として、この現実と対峙しながら、日本の対外的な「国信」を守り、欧米人の抱く否定的な日本のイメージやネガティブなステレオタイプを払拭し、克服するための「手段」として、「外から見られた日本」という視点に立脚した上で、対外的に「開化」をアピールし、対内的に「開化」を推進したと考えられる。

森は日本という国家を守り、生き残らせるために、良心の自由や政教分離の原則の遵守の重要性を訴え、日本を「文明国家」として外国から信用させるために男女の対等化、国際法や国際礼讓の遵守、私有財産の原則や公権力による不干渉、公教育における良心の自由と政教分離の遵守、そして「日本の条約改正に関わる事実の説明 *Statement of Facts relating to Treaty Revision in Japan*」に「開列」された内政外交に関わる様々な「開化」のエヴィデンスを交渉材料として欧米側に提示した。従って、自然権の認識なども含めた「開化」に関わるあらゆる要素は、森の思想構造上において「消失」したり、「追放」されたりするのではなく、森の設定した国家の「目的」に対して初めから従属関係に位置付けられ、「手段」化されているのであり、良心や私有財産の自由などの自然権を保障し、男女の対等化を実現し、さらにはキリスト教信仰やモラルなどを日本に敷衍するために国家を設立しているのではなかった。このように、国家を守り、生き残らせるために欧米の制度や思想、価値観などを「手段」として利用し、国際的に日本を「文明国家」として認識

させるために外形的な武装を施す「外交官としての森」による「戦略的西洋化」乃至は「西洋への擬態化^{カムフラージュ}」は、そのような思考様式を成立させる前提として、西洋文明に没入せず、心酔せず、そして気触れることなく、西洋文明を相対的、客観的に捉え対象化することで、取捨選択することを可能とする「脱西洋主義者」としての思想的立脚点に森が初期思想の段階において到達する必要があった。

また、森の思想構造上において、「目的」と「手段」の関係は生涯倒立することなく一貫して維持されたが、この「開化」という「手段」を国際的にアピールし、また国内的に推進するためのアプローチにおける変化が、森の対峙した対外的、対内的な現実との緊張関係の中で生じてくることに注目した。つまり森の「手段」に関わる「方法」が変化していくと考えたのである。当初森は、国際的に、日本の「開化」に関わる現状や課題について偽ることなく語り、記し、さらには、政財界や学術界を代表する欧米人の中に「親日家」を形成し、森が外交官として「開化」を発信するばかりでなく、「親日家」の口から日本の「開化」や「国益」を代弁させることで、日本に対する否定的なイメージやステレオタイプを払拭させるという「方法」を展開した。しかし、明治十年代の中頃に至ってもなお、欧米側の抱く対日評価が一向に変化を示さず、野蛮非文明のアジアという「カテゴリ」の中に位置付けられ続けている現実と対峙した森は、日本の「開化」をより一層分かりやすく、明確な形でアピールするために、「脱亜」言説を用いる戦略へと「方法」を展開し、意識的に「開化」のレベルにおいてより劣等な位置にあるアジア諸国と日本を差別化し、日本を特別視させる言説を組み立てることで、欧米における対日認識や評価を「東洋の先進国」という形へと再構築しようとしたのである。

国内的には、明六社による国民啓蒙活動や、行政府への意見書の提出などを通じて「開化」を推進したが、森がその歴史観に依拠して理念化した日本固有の国民形態、即ち「国家的存在の中核 the center of our national existence」としての天皇と「一切の政治的階級分化 no political class—division」の存在しない「臣民 His subjects」から構成される国体構造に対して、森の対峙した実態としての国民の大部分には、国民意識やその自覚、国家への帰属意識が欠落し、愛国心や忠誠心をもって日本を支える「立国」の主体とは程遠い存在に留まっていた。森は国民の実像や、そのような国民との関係において「開化」は全く意味をなさないという現実に「絶望」することで、国民一人ひとりを「開化」の主体、乃至は推進者にするのではなく、現実的、合理的に国民全体の中から一国の「開化」を担い得るものを「選抜 select」し、欧米との国際関係、国際競争、パワーバランスを前提として、日本の必要とする「国益」に関わる専門的な「知識 knowledge」や「技能 skills」を有する「特別な資格 specially qualified」をもった専門家による組織体、「国民議会 National Assembly」を構想することへと、国内的な「開化」の推進「方法」を展開させた。

「国民議会」は天皇や天皇の信認した行政府の諮問に応じて各「国益」に関わる「助言」を与え、国家意思＝国家の政策や方針の形成に寄与することを目的として設立される「忠実な臣民」を構成員とした「諮詢」、「奉仕」の組織であると森は説明した。従って、「国民議会」がその機能を果たすためには、「国民議会」設立以前の問題として、個人が「私利」ではなく「公利」の「志操」に富み、それぞれの分や能力に応じて、「勤働」に「国役」を行う「義務」を忠実に果たす「臣民」として育成されていることや、各「国益」に関わる専門的「知識」や「技能」を有する専門家を事前に育成、選抜することが不可欠な条件となる。この国民の「臣民」化と「専門家」化という課題を担う事前の育成、選抜システムとして森が用意したものが諸学校令に基づく教育制度であったと本稿は考えた。森の設計した諸学校の全てが個人の自由や福利のためではなく、国家の「独立」という「目的」を実現するための装置と規定され、「教育」領域と「学問」領域を明確に区分した上で、「教育」領域では「帝国臣民」の育成、「学問」領域では諸学校の体系化、階層化を踏まえ、国家の「須要」に応じ、その「国益」に適う優れた能力や知識、技能をもった「学術精錬ノ士」＝「開化」のプロフェッショナルの育成と選抜を構造的に設計していたと考えられるのである。本稿は、国内における「開化」を最も現実的、効果的に推進する組織体の実現を保障し、担保する事前の育成、選抜システムが、森の構築した諸学校制度であったと考えたのである。

森は自らの国家構想に関わる設計図を明確に描いていたが、それを実現する前提となる教育制度を形にした段階において、不敬で、非愛国的存在としてのレッテルを張られ、兇徒の手に落ちた。森が暗殺されたことは、外交官として、そして何よりも「疑いようのない愛国者 undoubted patriotism」として、日本を守り、生き残らせるために、森が築き上げようとした日本の近代構想における一つの選択肢の終焉を意味していたのであった。